小田原広報

まちづくり情報誌

2001 3月号 3/1

平成13年3月1日発行
No.790

●特集

教育を語ろうII

教育
本音で話そう
part. 1

小田原ならではの教育改革を

小田原独自の教育への取り組み「静かなる教育論議」が動き出しました。
子どもたちの豊かな未来のために、
私たちは何から始めればよいのでしょうか。
小田原はどのような「教育」を目指せばよいのでしょうか。
大窪小学校の教室を舞台に、まずこの三人に本音を語ってもらいましょう。

戦後教育のひずみ

市長　今、日本という国の中で何かがおかしくなってきた感じがします。特に教育については、学校の先生をはじめ、国や地方などみな必死で努力をしてきたと思うのですが、どうもしっくりこないのです。小田原でも同じことが言えます。そこで私は、小田原の教育を何とかしなければと「静かなる教育論議」を起こすことを考えました。これは教育について、市民社会を挙げて一人一人が真剣に考えていこう、というものです。そのためにはみんなで議論をしていかなければなりません。この点について、今日は率直なご意見をお聞かせ願いたいと思います。

秋山　お話のとおり、戦後教育のひずみがたまりにたまって噴き出してきたのだと思います。資源の乏しい日本は、経済復興をするために、欧米に追いつけと能率重視の教育をしてきました。ある意味それは成功をしたと言えるでしょう。しかし同時に、学歴偏重かつ利己主義的な社会をも作り出してしまったのです。子どもたちは、入学試験を重視される学力競争の中で、精神的ゆとりを失い、いじめや不登校、そして人間関係に悩まされることになりました。

先般、小田原市では、さまざまな立場から学校の教育について考える学校教育懇話会という組織を立ち上げました。また「静かなる教育論議」という新たな方向性も提示されました。教育のひずみが浮き彫りになってきた今だからこそ、新たな流れを生み出す絶好の機会なのではないでしょうか。その意味で小田原市は先見の明があって、全国的にもかなり

教育のひずみが浮き彫りになってきた今こそ、新たな流れを生み出す絶好の機会なのではないでしょうか

小澤 良明 市長

秋山 仁（じん）さん（数学者）

東海大学理学研究科教授のかたわら、文部省教育課程審議会委員、NHKテレビ・ラジオ講座の講師を務めるなど多方面で活躍中。平成12年11月には小田原市学校教育懇話会副座長に就任。

江島 紘（ひろし） 教育長

早い段階でこの問題に着手していると思います。

2002年から新しい教育カリキュラムが始まろうとしています。学校週五日制の中、既存のカリキュラムの3割が削られ、新たに欧米にあるような総合的な学習の時間が導入されます。これについては、学力の低下を招くのではないかなどの賛否両論が出ていますが、私は量より質が問題だと考えています。いかに質の良い教育が行えるか、どうすれば子どもたちにとって豊かな教育を与えてあげられるかが本質的な課題なのです。従来のやり方を維持していけばいいとは思えません。今後、懇話会の中でこの点についても議論させていただきたいと考えています。

小田原から教育改革を

教育長 私たちに与えられた課題はたくさんありますね。最近よく言われるようになった学校・地域・家庭の連携についても、頭では理解していてもまだまだ十分というわけではありません。保護者の中には「学校が何とかしてくれる」という意識が残っていることも多いのです。逆に学校はもっと地域に門を開いていかなければなりません。さらに言うと、教育委員会が積極的に市民の皆さんの方に出て行って、子どもにとって本当に必要なものを探していかなければならないと思っています。これからは市が進める「静かなる教育論議」と連動していくことが必要です。そうすれば、小田原はもっと素晴らしく、子どもたちはもっと幸せになります。そのために、私たちのやることはたくさんあるのです。

市長 教育長はとても先進的なお考えをお持ちです。教育改革とは教育現場だけを変えていけばいいという訳ではありません。教育を取り囲む環境をも変えていくことが真の教育改革につながります。だからこそ教育委員会と行政がいっしょに取り組んでいくことが大切だと私は思います。そのためには決して努力は惜しみません。

秋山 忘れてはいけないのは、だれのための教育かということでしょう。中心に据えるべきは間違いなく「子ども」です。各人の能力を伸ばして生きがいのある人生を送らせてあげること、そのためには何をすればいいのかを考えるのです。

最近、子どもたちの学力低下が話題にされますが、知識量が減っていることよりも、むしろ、学ぼうとする意欲が低下していることが問題だと考えています。これからの世の中を生きていくためには、知識を持っているということより表現力や独創力、発想力、そして自己解決能力が必要になってくるのです。

今、教育のひずみが指摘されています。今こそ何か思い切ったことをやってみるチャンスであり、できることはたくさんあるはずです。東京の高校では、子どもたちが自由に学校を選べるようになりました。各学校の個性化が期待されてのことです。努力している先生が報われるような制度を取り入れていくことも必要かもしれません。

教育長 秋山さんにも参加いただいている学校教育懇話会をはじめ、さ

まざまなところでこのような議論が起きるといいですね。その上で学校教育推進計画を作り、小田原で何ができるかをかたちにして、皆さんに答えを出したいと思っています。

秋山　この広報誌を読んだ人の中にも、よい案を持っている方がきっとたくさんいますよ。

子どもたちの未来のために 小田原の未来のために

市長　ところで、先日カンボジアの湖上生活者の様子を放送していたテレビを見ました。その生活は裕福とは言えず、子どもは学校にも行けない状況にありましたが、生き生きとした子どもたちの表情には感動を覚えました。家族が一つになり、力強くたくましく生きているのを見て、子どもに必要なのは学力だけではないんだな、とあらためて思いました。日本も昔はそうだったんですよね。みんなでこたつを囲んでいると、親とも兄弟ともいろいろな話ができました。これこそ日本が生んだ「こたつ文化」と言ってもいいのではないでしょうか。

秋山　経済的に恵まれているはずの日本で、夜遅くまで学習塾に通い、栄養ドリンクを飲んでため息をついているような小学生を見かけると、「教育」って何なんだろうなと思いますね。大切なのは試験勉強や学歴ではないんですよ。

教育長　私は小田原の子どもたちには、生きるとは何か、幸せとは何かを学んでほしいと思っています。いい学校に行くことも大事でしょう。しかし目指す方向は一つではありません。教育の成果とは、子どもたちの顔が輝いた時に初めて「成果が現れた」と言えるのだと思います。

秋山　勉強を教えるとは、学ぶ姿勢を教えること。言い換えれば、おもしろさを伝えることです。たとえば「私は歌はうまくない、でもみんなで歌うのは楽しい、ずっと歌っていきたい」。子どもの心にやる気の炎をともすことが一番大切なのではないでしょうか。

市長　結局、努力をするのは本人です。興味や、やる気がなければ前に進めません。その手助けをしてあげるのが教育であり、大人の役目ですね。環境問題にしても、一人一人がごみを出さない努力をすることで解決に近づきます。大切なのは市民社会全体で子どもを育てていくことなのです。子どもがいる人もいない人も、ほんのひとときでも子どものことを思ってほしいと思います。一人の百歩よりも百人の一歩が必要です。私が考える「静かなる教育論議」もここが原点なのです。

教育長　そのためには、学校と地域そして家庭の協力が不可欠です。かつて地域コミュニティ、あるいは大家族の中でうまく子どもを育ててきた時期がありましたが、今は都市化や高度経済成長の過程の中でこの関係が壊れてしまいました。しかし幸いなことに、小田原にはまだこのような環境が残っています。みんなが関心をもって手をつないでいけば、かならず再構築できます。いい教育ができるのです。まち全体で議論を起こしましょう。教育委員会としても、議論されたことについては、必ず真剣に取り組んでまいります。

秋山　これまでは、大人たちが教育を他人任せにして本気で考えてこなかった。それが今のように教育がイビツになってしまった原因です。子どもは社会の宝物。学校だけ、家庭だけではなく、全員ではぐくんでいかなければなりません。そう考えてみると、あらためて小田原というまちの素晴らしさを感じます。ここには豊かな自然があり、歴史があって文化まである。子どもたちを狭い空間に閉じ込めていてはもったいない。知らない子どもでも、まず子どもが良いことをしたらほめ、悪いことをしたら、ただしかるのではなく、なぜいけないかを諭す。悩んだり失敗しながら成長するのですから、大人は答えを押しつけず、子どもが自力で解決できるように気長に見守る。そうして子どもの心に火をともしましょう。若者が荒廃しているとすれば、それは夢と希望を失っているからなのです。彼らが高い志を持てるよう、力を合わせて頑張っていきましょう。

市長　秋山さんも、小田原ならではの教育改革を進めるため、ぜひお力をお貸しくださるようお願いいたします。

今日はありがとうございました。

子どもは社会の宝物。学校だけ、家庭だけではなく、全員ではぐくんでいかなければなりません。

教育●本音で話そうpart.2

私はこう考える

島田 祐子さん

声楽家。平成12年3月1日から小田原市教育委員を務め、「小田原・城下町大使」としても活躍。内閣府男女共同参画局仕事と子育ての両立支援策に関する専門調査会委員に就任。

自分を磨き続けるために

1年前から教育委員として小田原市の教育に携わっている島田さんは、一人の声楽家として今でも先生のレッスンを受けているそうである。「教えていただけるってとても幸せなことだと、子どもたちに伝えたい」と話す島田さんに、教育についての考えを伺った。

人生を変えた先生の一言

私は小学校1年生のときに、新潟から小田原に越してきました。音楽はずっと好きだったのですが、いつも小さくなって下を向いてばかりいるような子どもでした。

それがたまたま3年生のとき、学年代表の合唱団のメンバーに選ばれたんです。その練習で、先生から指名されて一人でみんなの前で歌ったところ、先生は「ほら、楽しそうでしょう?祐子ちゃんのように歌いましょうね」とおっしゃったんです。先生は私の声を聞いていてくださったんだ、私も認められたんだって、本当にうれしかったのを鮮明に覚えています。これ以降自信がついて、胸を張って生きられるようになりました。

先生はあまり意識していなくても、ちょっとした一言が子どもには「宝物」になったり、心に刺さって深い傷を負わせる「鋭い槍」になったりすることがあります。先生には、その影響の大きさや責任の重さを感じながら、子どもと向き合っていただきたいですね。

まず大人がお手本を

今は物に満たされていて、自然に我慢を覚えられるような環境がどこにもありませんから、子どもたちには、耐えることや我慢することを経験させて学習させる機会を、意識して与える必要もあるでしょう。

でも、今の子どもたちに何か欠けているものがあるとすれば、それは私たち大人の責任ではないでしょうか。子どもは大人をよく見ています。しかも、真っ白な心と正しい目で見つめています。だからこそ大人は、信念を持って行動し、「こういう人になってほしい」というメッセージを伝えていかなければなりません。

イタリアにいたとき、松葉杖をついて歩いていた人が転んでしまったのを見たことがあります。道路を隔てた向こうの歩道のことで、私は驚いて立ちすくんでしまったのですが、倒れた人を助けようと周囲にいた人々が一斉に駆け寄って、あっという間に人だかりができたんです。それを見て、思わず涙があふれました。人には、人を思いやる気持ちがもともと備わっているんだと、確信できたんです。

お父さんやお母さんが、子どもたちの手本になるような行動を自然に見せて、真剣に思うところを訴えれば、言いたいことは必ず子どもには伝わるのではないでしょうか。

人間は生涯1年生

「志を高く持って自分を磨くこと」、それが「勉強」だと私は思います。人は、平等に才能を持って生まれてきます。その才能を磨いて高めていくことに終わりなんてないから、言ってみれば人間は生涯1年生で、生涯が勉強の連続だと私は思うのです。学校での勉強は、自分を磨く基礎を築く上でとても大切です。どんな分野で活躍するにも、基本的な学力は必要だと思います。私も、もっと基礎学力をつけておけばよかったと思うんですよ。

教育委員になってちょうど1年。これまでの人生の中で、こんなにたくさん「教育」に関する書籍や資料を読んだ経験はありませんでした。教育は、一言で簡単に語れるようなものではありません。子どもは一人一人違って、決してワンパターンではないので、いろいろな角度からアプローチしないとわからないのです。そして子どもだけでなく、現場もそれぞれ違います。現場で学んでいる人、教えている人、そしてさまざまな問題に直面し悩んでいる人たちから話を聞いて、もっともっと勉強していきたいと思っています。

小田原は生涯学習が盛んで、さまざまな講座に大勢参加されていてすばらしいですね。会場まで足を運んだりノートをとったり、その労をいとわず自分を磨いている姿には、尊敬の念を抱きます。勉強を続けることが困難な状況で、さらに自分を磨くというのは生易しいことではありません。でも困難を克服してどこまで自分を磨き続けられるかで、人の価値は決まるような気がします。私も、自分を磨き続けたいですね。

FIRST COMMENT

教育
本音で話そう
part. 2

私はこう考える

声をかけ合おう！

足柄下地区の生徒会役員研修会を担当した先生、という立場で今の子どもたちの素顔などについて話してもらった。

声を出そうよ！

「学校生活でここがおかしいとか、これを変えた方がいい、とか気づいたことがあれば、自分たちから提案してみてもいいんだよ」。以前、生徒の前でこんな話をしたことがあります。そうしたら生徒からは「そうなってるんだからそれでいいじゃん」という答えが返ってきました。問題意識を持ったり、先生に気軽に意見を言うような生徒が、年々少なくなっています。

私が参加する生徒会の研修会では、お互いの学校の苦労なども話し合われます。「部活動に行く時間がない」「生徒会総会などでも活発な意見が出ない」「生徒会で何かを言っても、みんなが協力してくれない」など、悩みも多いようです。どこの学校の生徒会も、よくがんばっているとは思いますが、なかなかうまくいかないようですね。

私は、良い解決方法が見つからなかったら、他の学校の生徒会に相談することをすすめました。共通する問題もあるでしょう。困ったときはお互い様だというように「声に出して意思を表す」ということが大切なのです。

第一声で始まる問題解決

お互い様だといって助け合う、あるいは声をかけ合うということは生徒会に限らないことだと思います。学校生活をはじめ、地域社会でも同じです。何かあった、何かに気づいた、そんなときにお互いにちょっと声をかけ合うことはとても大切なことです。

何かあっても知らんぷり、関係ないという雰囲気はどこにでもあります。孤立した状態だとストレスはたまるし、だれかに声をかけようという気にもなれない。この悪循環が生まれます。何かあったときに急に声を上げることは難しいことです。

だから、日ごろから声を出しましょう。学校生活でも、自分の席の近くに何か落ちていたら「これだれの？」と自然に声が出ることが第一歩です。問題解決のため、声をかけ合う。そして、みんなでいっしょに考える。これが教育の原点だと思います。

原 明宏さん

小田原市立城北中学校教諭。平成12年度足柄下地区生徒会役員研修会を担当。

学校ってなんだろう

相談指導学級で子どもたちの兄貴分として相談を受けている石井さんが本音を語ってくれた。

コミュニケーションの難しさ

今の子どもたちは友達を作るのが苦手な子が多いですね。気を遣いすぎていると思えば、当たり前の気配りができなかったりするんですよ。人間は成長して社会に出ると上下さまざまな世代とのつきあいの中で人間関係を築かなくてはなりません。実は、同じ年代だけでまとまりを作って生活するのは、学校だけなんですね。子どもたちはこの集団生活の中で楽しいことや苦しいこと、また相手を思いやる心を学びます。この経験は人生においてとても重要なのです。

石井 政道さん

教育相談指導学級主任・学校心理士。いろいろな問題を持つ子どもと保護者のための相談学級で相談役として頑張っている。

SECOND COMMENT

満足・まあまあ満足・不満足

学校は勉強を教えるところ。これは間違いありません。でも全員にすべてをわからせることが目的だとしたら、それは違うような気がします。すべての教科で全員が満点を取るなんてできるはずがありません。そのような教育を目指すと、必ず落ちこぼれる子どもが出てきます。人間は万能ではないのです。

極端な話ですが、評価の基準を自己採点方式にし「満足・まあまあ満足・不満足」としたらどうでしょう。かけっこで最下位だった子が必ずしも「不満足」と書くでしょうか。前より努力してタイムが上がったとしたら、本人は「満足」と書くかもしれません。教師は本人の意欲を引き出すような評価を目指すべきなのだと思います。たくさん勉強したい人にはどんどん教える、早く走りたい子には走らせてあげる。そうすることで、学校に行けない子どもが一人でも少なくなれば、私はとてもうれしく思います。

相談指導学級はいわば「道の駅」のようなもの。子どもたちは少し休んでまた道に戻っていきます。彼らにも素晴らしい未来があってほしい。教育について地域や家庭も含め、みんなで考えようとする気運が高まっていることは素晴らしいことだと思います。しかし学校の果たすべき役割が減ったわけではありません。

たっぷりと魂の世話を

中学校という社会の中で日々奮闘する市川校長に教育現場からのお話を伺った。

ストレスを抱える子どもたち

子どもたちが反社会的な問題行動を起こすと、その行為とストレスを負わせた環境に非難が向けられますが、なぜそのような行動を取ってしまったかという過程に心を向けてほしいものです。学校生活には集団のルールがありますし、同年齢の子が凌ぎを削る場面も日常的なことですからストレスは発生して当然です。家庭でのストレスを学校生活に引きずっている子もたくさんいます。しかし不満や悩み、反抗心からくるストレスのない思春期があるでしょうか。この葛藤の経験を通り抜けることなく自立心や克己心は育ちません。ストレスを解消できる能力を身につけさせることが大切なのです。

家庭教育と学校教育のひずみ

戦後の日本は、アメリカの個人主義的なライフスタイルを取り入れようとしてきましたが、日本人の生活感覚にはそぐわない部分もありました。学校中心に行ってきた教育にもそのひずみが出てきたのでしょう。子ども同士の集団生活や異年齢の仲間活動は学校以外では難しくなっています。週五日制のゆとり活用にしても、学校に行っているから安心だ、先生がいるから大丈夫だという時代から自分たちの時間は自分たちの地域やリズムにあった工夫をする時代になりつつあります。幸い私たちの白山中学校区では保護者や地域の方の理解もあり、地域と学校が連携して子どもを育てようとする気運が高く感謝しています。

「三つ子の魂百まで」は事実

養育といえば、江戸時代には「三つ心。六つ躾。九つ言葉。十二ふみ。十五理で末決まる」こんな段階的な教育方法が定着していたそうです。最近では中学生にも心の教育が求められていますが、「十二心。十五躾」では心配です。幼児期での愛情や教育の欠落は、体に心の成長が追いつけない状況を呼び込みます。小学校に入学してからようやく自分以外に心を開くことを覚え、中学生で遅ればせながら本来ならば小学生でも知っている社会のルールを学び始める場面に出くわします。このスタートの遅れを取り戻すのは容易ではありません。家庭における幼児期の教育を考え直すことが必要です。たっぷりと魂の世話を。

市川 紀征さん

白山中学校校長。教員生活38年、市内小・中学校をはじめ県教育委員会指導主事などの経歴を持つ。

教育
本音で話そう part. 2

私はこう考える

年齢を重ねるだけでは大人になれない

子どもは、いろいろな人から影響を受けて成長している。世間から大人と認められる年齢になった若者は、それを振り返って何を感じるのか。今年の成人式の運営委員を務めた佐々木さんに、成人を迎えて考えることについて話してもらった。

「大人」ってどんな人？

今年、成人式に運営委員として関わりましたが、本当のことを言うと、「成人した」とか「大人になった」とかという実感はあまりありません。「大人」ってどういう人のことなのかなぁと考えてしまうからです。

たとえば、ごみをその辺にポイッと捨てちゃう人がいますよね。僕は中学生のときに、授業で「みんなが気をつけないと、地球は汚れてしまうんですよ」って、きれいな地球が見る見るうちに汚くなってしまうという映像を見たんです。それで「気をつけないとああなっちゃうんだ」って思って以来、ポイ捨ては絶対しないって自分で決めて、実行しています。「えらいね」って言われることもあるけど、別に大変なことじゃないし、特別すごいことをしているわけではありません。子どもでも守れるルールを守らない大人がいるのは、何でだろうって思いますね。成人式のマナーも話題になっているから、えらそうなことは言えませんけど。

僕もこれから経験をもっと積んで、ただ子どもが年をとっただけの「年齢だけの大人」にならないようにしようと思います。

先生は大人の代表

今、いじめのことがよく話題になりますけど、問題なのはいじめが起こるきっかけより、あの子をいじめよう、無視しようって言うリーダー格の子に、だれも逆らえないということのような気がします。リーダー格の子が「やめよう」って言えばみんな従うけど、それを自分が言ったら、「いい子ぶるなよ」って言われそうで言い出せないという気持ちは、僕にもよくわかります。

ここで、みんながリーダーと認めるような先生が「いけない」って言ったら、みんな聞くと思います。子どもにとって先生は大人の代表だし、先生に言われてなぜか鮮明に覚えている言葉って、多分みんなあると思うんです。隠しごとのできないような、卒業してもつきあいたいような、魅力的な先生がたくさんいるといいなぁ。

子どもへの教育を放棄していませんか

子ども会の会長から下府中青少年育成会会長として、忙しい仕事の合間をぬって精力的に青少年活動をサポートする栗原さん。父親として役員として奮闘してきた経験から、その思いを語ってもらった。

教育現場のいつもの光景

子どもは地域・家庭・学校が協力してはじめて育つと思います。また、親もその自覚をもってほしいと思います。

子どもが所属する子ども会・PTA・クラブなどさまざまな団体で、親同士が役員の押しつけ合いをする光景を目にします。また、無関心を装ってその会議に欠席する保護者も見受けられます。私はその親に「あなたは子どもへの教育を放棄していませんか」と言いたい。もちろんいろいろな事情で役員を受けられない方もいると思いますが、できる限り子どもの教育現場をサ

THIRD COMMENT

佐々木 圭さん（別堀）

平成12年度成人式運営委員。「やれることは全部やりました。無事に終わってホッとしています」と話す大学2年生。

栗原 博さん（中里）

下府中青少年育成会会長。青少年補導員など10人とパトロールを行うなど地域の青少年指導に努める。「川東地区は大型店の進出により、子どもを取り巻く環境も大きく変わっているんです」。

ポートすることが親の義務だと思うのです。地域・学校が育てば結局のところ、家庭や自分の子どもに返ってくると思います。

少子化が生んだ悲劇

一昔前の親は子どもが多くて、一人一人を見ることができませんでした。しかし、今では十分に目が届きます。そこに落し穴があると思います。

家庭において常に中心である子どもは、「我慢する」という経験が不足します。コンビニなどの普及によって「飢える」ということもありません。いつでもお腹いっぱいです。金銭的にも豊かです。その結果、自分で処理できないような我慢する事態に直面したとき、子どもは困惑します。ときには考えられないような問題行動が起こることもあるのです。

実際、少子化に伴い、地域においても子どもを取り囲む状況が変わり、子ども会・クラブといった団体活動の運営が大変だと伺っています。

子どもをかわいがると同時に、我慢させたり、最低限のルールがあることを教えたりすることが親の責任であると思います。

学校に行こう！　学校をつくろう！

PTAの会長でもある鈴木さんは仕事の合間をぬって酒匂中学校に週に二日は足を運ぶという。最近の学校の状況から、その思いを語ってもらった。

がく然とした我が母校の様子

数年前の酒匂中にはびっくりしました。授業中でも、教室の外で遊んでいる生徒がいる。先生は何度注意しても言うことを聞かない生徒に対し、疲れ切っている。正直言って、これが学校かと思いました。

そこで「なんとかしたい」と保護者・学校が相談して、「授業参観日」だけでなく、希望があればいつでも学校を自由に見学できる「学校参加日」を設けました。親をはじめ近所のおじさんおばさんが毎日のように学校にやってきました。

子どもたちも見られているということで、自分自身で変わっていったと思います。あんなに、疲れきっていた先生までもが、いきいきと元気を取り戻していきました。

学校はただの器でない生きている

一度開かれた学校は、本当に輝いていきました。学校でコミュニケーションが図れるようにと、ゲストティーチャー室ができました。バザーでの収益で、その部屋にはじゅうたんが敷かれ、ソファーが置かれ、ゲストティーチャーで来られた保護者・地域の方に利用していただけるようになりました。また、先生と保護者がいつでも気軽に話ができる場になりました。みんなで作った、みんなで持ち寄った地域の交流の場が学校にできたのです。

自然と学校からタバコの吸い殻が消えました。生徒も明るく素直になりました。

学校が隠すことなく、なんでも正直に地域に伝えた。その結果、地域が真剣になって立ち上がり、どうしたら学校が良くなるか、学校に目を向けて考えたのです。

学校は生きています。その地域の単なる建物では意味がないのです。みんなの力で盛り上げることで、明日の地域を担う若者を育てる場として輝いていくと思います。

鈴木 省三さん
（電気工事業・小八幡）

酒匂中PTA会長。職業の知識を活かし、先生と二人三脚でゲストティーチャーとして子どもたちに「電気」「エネルギー」などを教えている。またあるときは有志とともに学校トイレのペンキ塗りを行うなどボランティアも行っている。

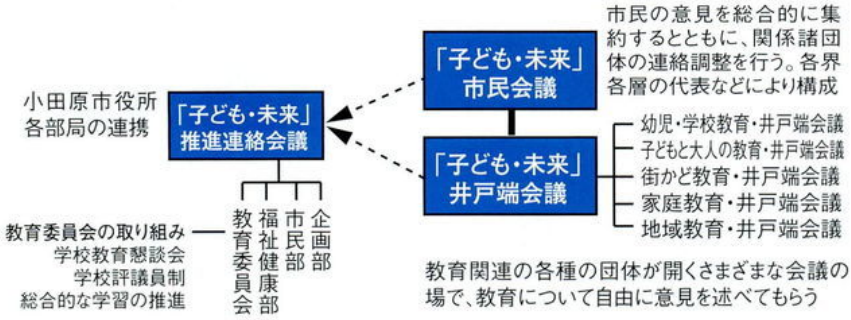
教育
本音で話そう
part. 3

もう始まっています「静かなる教育論議」

「静かなる教育論議」が、いよいよ動き始めました。一人の一歩がみんなの一歩に、そして大きなうねりになっていくために、「教育論議」を進める組織をつくっていきます。その中の一つ、教育委員会でも新たな取り組みが始まっています。

問教育総務課 ☎33167 1

「教育論議」組織イメージ図



「静かなる教育論議」を進める組織は、前回の教育特集（昨年11月1日号）でもご紹介しましたが、イメージ図のような構成になっています。これらのうち、いくつかの井戸端会議は既に開かれ、貴重なご意見をいただいています（P12～13参照）。このような組織でみなさんに議論していただき、その成果が子どもたちの未来のために生かされていきます。

新しい時代に対応した学校教育プランの策定を目指して

「平成14年から学校が変わる」最近よく耳にする言葉です。「ゆとりある教育活動」を進め、「総合的な学習の時間」を作る。そして「学校評議員」を設け、「完全学校週5日制」を実施することなどが主な内容です。これらは学校で行われるいろいろな教育内容の基準となる学習指導要領の中の、新しい教育課程の基準として定められたもの。この学習指導要領が変われば、教育への取り組みが大きく変わります。

(仮称)学校教育推進計画を作る
～教育委員会の取り組みⅠ～

小田原では、総合的な学習の時間や学校評議員制などについて、国の動きを先取りして既にできることから始めています。このまちにふさわしい学校教育を進めるためには、現在の枠にとらわれない将来をしっかりと見通した教育プランが必要となります。

そこで、21世紀を担う子どもたちの生きる力をはぐくみ、小田原の地域性を生かした学校教育を目指すために(仮称)学校教育推進計画を作ることにしました。

教育プランを作るには、まず教育を取り巻く環境や現状をあらゆる面から分析し、見つめ直すことが必要です。このため、学校教育について、高い見識と豊富な知識を持った方による学校教育懇話会を設置して、広い視野から教育について議論し、教育プランの道しるべとなる提言を出していただきます。

学校教育懇話会について
～教育委員会の取り組みⅡ～

学校教育懇話会は、昨年11月にスタートし、今年1月に第2回の会議を開きました。メンバーは10人。商工会議所専務理事の劔持多喜雄さん

を座長に、東海大学教授で文部省の教育課程審議会委員でもある秋山仁さんが副座長を務めます。ほかに教育経験のある方や、PTA、子ども会、個人で教育にかかわっている人などが加わり、幅広い視野からの意見が出されています。会議では毎回違うテーマを決めて論議が行われており、1月19日の会議では「少子化社会に対応する学校のあり方」をテーマに、自由学区制、幼稚園・小中学校統廃合と施設の整備について論議しました。ここでは、最近の教育環境に対応する学校施設のあり方や、小田原の地域性から見た自由学区制の考え、中高一貫教育のあり方などが話し合われました。今後は特色ある楽しい学校づくり、情報化・国際化、心と体の健康に対応する教育、学校・家庭・地域との連携などを論議していきます。学校教育懇話会では1年後に結果を提言し、これを受けて新たに設置される研究協議会が、平成15年の（仮称）学校教育推進計画完成に向け、さらに研究をしていきます。

＊小田原の教育改革については、これまでも広報おだわらの中で「学校が変わります」のページで、具体的な取り組みについて紹介していますので、ご覧ください。

子どもたちの未来を考える集い（シンポジウム）開催

今後、静かなる教育論議をまち全体で盛り上げていくために、シンポジウムを開きます。子どもたちの未来について、教育関係者や青少年の育成に関わっている市民の方が幅広い意見を交わします。当日はタレントで自然暮らしの会代表の清水國明さんを迎え基調講演を行っていただきます。

＊詳しくは、14ページをご覧ください。

静かなる教育論議はまだまだこれからです。今まで、とかく他人任せにしがちだった教育について、これからは一人一人が自分のことと考えてどんどん議論を起こしていきましょう。教育の主役は私たちです。

この懇話会が目指すもの

学校教育懇話会座長 剱持多嘉雄さん

「教育」という言葉が、今ほど重く、そして大きな社会現象として使われている時代はないでしょう。日本では、明治維新、第二次世界大戦後と2度の大きな教育改革を行っていますが、これらは、戦争によって社会生活そのものが大きく変革したことによるものでした。今回のように、社会の成熟に伴う改革は初めてと言っても過言ではありません。

学校教育懇話会では、このような日本全体の教育改革の流れの中で、小田原の教育の現状を見つめ、21世紀を迎えて小田原市ができる教育というのは何なのかということを念頭に置いて、小田原の風土に合った教育プランの策定に向けて議論していきたいと思っています。

昔はよその家の柿を取ってみんなで食べこともありました。決していいことではありませんが、叱られながらもなぜか地域がそれを許すおおらかな空気があったことを思い出します。残念ながら、今はこのような風景は見られなくなってしまいました。学校・家庭・地域が一体となって、かけがえのない子どもたちを守り育てていくことの重要性は強く言われていますが、実際には十分に機能していないように思います。私は教育に関しては素人ですが、いろいろな形で教育に関わっている委員の皆様とともに、自分が関わっている経済界としての視点から教育について語っていきたいと思っています。明日を担う子どもたちのために、実りある懇話会にしていきたいですね。

教育
本音で話そう
part. 4

続々と寄せられるご意見！

「静かなる教育論議」は大きなうねりに

教育を語ろう！という呼びかけに、さっそくお手紙やファックスが届きました。いろいろな懇談会の席でも、教育への熱い思いが交わされています。これから、子ども会などの教育に関わる団体や地域の中で、井戸端会議が始まろうとしています。さまざまな井戸端会議で、お手紙・FAX・Eメールなどで、みなさんの活発なご意見をお待ちしています。

お年寄の方の力を今こそ借りて
いっしょに「共育」しましょう

今、子どもたちがおかしいです。もっともっと、これからおかしくなるでしょう。
おかしくなっている原因は、私たち大人にあります。その大人たちが、今どうしなければいけないのか、真剣に考えなければいけません。とくに子どもの心の教育が大きな問題です。
そこで、お年寄りの力を借りて、学校で高齢者による授業を取り入れてみたらどうでしょうか。心を閉じてしまった子どもたちも、やさしいお年寄りになら心を開くのは家庭ではよく見かける光景です。元気なお年寄りに力を借りて、子どもたちといっしょに「共育」しましょう。子どもにもお年寄りにも、きっとプラスになるはずです。
(40歳代　主婦)

「学校」と「家庭」での両立こそ新の教育

教育問題については、万事が今始まったものではなく、人生の礎として一寸たりとも見放すことのできないものだと思います。
私たちは戦前の教育を受け、古い言葉ではありますが「師の陰を踏まず」という気持ちを大切にしてまいりました。
学校教育は先生にお願いして、しつけのような家庭教育は私たち親がしっかりと守る。この両立が真の教育であろうと思います。
先生は生徒の育ての親であり、私たちは子どもの親です。それぞれが教育を見直す時期に来ているのではないでしょうか。
(70歳代　男性)

届かない学校への意見
外部との交流が少ないように思う

学校は勉強を学ぶところです。基本的なしつけは保護者の方にお願いしたいですね。
最近、学校が批判の対象になっていますが、学校現場では、案外、保護者から教師に対する批判の声は届いていません。内申書を気にしているのでしょうか。最近は、成績ばかりを気にしていて、人間としての力を育てることがおろそかにされているような気がします。
現在は教師をしておりますが、以前に民間会社に勤めていた経験から言うと、学校は外部との交流が少なく、情報が入ってこない特殊な世界ではあると思います。
私が教師を志望した理由は、子どもを自分の思ったように育てようと考えたからではなく、自分が役立つことはないか、子どもが自分から何かを吸収して成長してくれたらいいと思っています。
(40歳代　中学校教師　男性)

「子どもは親の心を実演する名優である」
信頼し合う明るい夫婦関係が親子関係へつながる

敗戦によって日本は根底から変わってしまいました。古くからの日本人の道徳観は捨てられ、間違った個人主義から発展した利己主義がはびこっています。今や物で栄えて心で滅びる危機に瀕しています。

このような現状に対しては、道徳、倫理観の立て直しが大切ですが、その基本は家庭教育にあると思います。家庭の基本は夫婦です。夫婦が互いに尊敬信頼して生活を築いていくことです。次に親と子のつながりがあります。親は子を慈しむ、子は自分の命の元である親、祖先を尊敬する。夫婦が横の線とすれば親子は縦の線です。この十字線がしっかりと結ばれていれば、家庭は健全に、それが拡がって社会、国家が栄えてきます。

「子どもは親の心を実演する名優である」と言われています。家庭教育において今、親自身がこのことを自覚していくことで、子どもたちは自然と立派に育っていくことでしょう。

教育の基本は、親夫婦が明るい心で生活を築いていくことから始まると思います。

(男性)

広報おだわら11月1日号の「教育を語ろう」を読んで

教育は社会や国の将来を左右する大切なものという切り出しに、共感を覚えました。これから行われる教育論議に、積極的に参加していきたいと思っています。

「教育」といっても、深く広大な海のようであり、一言で片付けることはできませんが、多くの親子を見ていると、実に単純に思えることがあります。お母さんが、子どもの思いを的確に理解し判断できる家庭では、夫婦の間もうまくいき、周りの地域社会にも上手にうち解けているということです。

そこに人間が幸せに生きていくためのヒントがあるような気がするのです。

(学習塾経営者)

理解しにくい現代の若者たちに
共感を覚えた出来事

知り合いの青年がバイク事故で亡くなりました。彼の無謀運転が原因でした。素直で、穏やかな性格の彼が、なぜヘルメットさえかぶらずに無謀な運転をしたのかは、いまだに疑問です。魔が差すとはこんなことかと思いました。

冷たい北風の中を、多くの友人たちが通夜に駆けつけていました。茶髪にピアスの少年たち、ルーズソックスの少女たち…。このファッションを快く思わない参列者もいたでしょう。でも、故人の噂話をヒソヒソと続ける年輩者をよそに、彼らはただただ黙って首をうなだれ、寒風の中を立ちつくしていました。読経の間、彼らは何を思い、何を考えていたのでしょう。彼らは、今まさに、人生において大切なことを学んでいると、私は感じました。

理解しにくいと言われる現代の高校生たちも、私たちと共感できるときがあると感じました。

(50歳代　女性)

こんな提言もありました

- 週5日制は、子どもにはかえって余裕がなくなるのではないか。
- 大人も悪い、しつけを子どもにきちんとすべきだ。
- 先生と生徒、親と子、近所の人と子どものふれあいが少ないのではないか。
- 週1、2回の手作り弁当の日を設けては？
- 子どもの悪い面を言い合うのではなく、良い面を見つけてあげることが大切なのでは。
- 一般人の校長への登用や学校評議員制度などについて、どう考えているのか？
- 運動会の徒競走で、速さによってグループ分けしているのは、子どもにどのような影響があるか？
- 奉仕活動の義務化はどうなのか？
- 熱意ある指導者など、子どもがスポーツに熱中できる環境を。
- 中学校区に男子校、女子校、共学をつくり、自由選択制にしたらどうか？
- 保護司、補導員の活動状況を知りたい。バックアップしたいが情報がない。
- 週5日制によって、子どもたちの生活はどう変わるのか？　PTAはどう考えるべきなのか？
- ふるさと切手の発行を機に、手紙を書く指導を学校で試みては。
- 先生もツーデーマーチに参加し、子どもといっしょに歩いてほしい。
- 土曜日が休みになると、先生と父母の接点が薄れるように思える。

大人がいい子を求めすぎていませんか？
まずは失敗から学ぶことを教えよう

だから、子どもは失敗することをおそれ、指示待ち人間になっていて、自分のことを自分で対処できなくなっているのです。

今、教育現場では「Plan Do See」から「Do Plan Do See」へ移行しています。つまり、失敗をおそれずに、まず行動してみようということです。失敗から学ぶ子を育てようとしています。

保護者の方には、子どもとのコミュニケーションが不足していると感じることがあります。家庭では夕食の時間を大切にしてほしいですね。親の働く姿を見せることも必要だと思います。

(教師　女性)

ご意見はこちらに

提出先　〒250-8555
小田原市教育委員会
教育総務課「教育私の意見」係
FAX 33-1286
E-mail
kyouso@city.odawara.kanagawa.jp

募集

清水國明さんがやってくる

このシンポジウムでは、清水國明さんを迎えての基調講演と小田原の教育関係者や青少年の育成に関わっている方を交えたパネルディスカッションを行います。大人も子どもも、みんなで教育を考えましょう。

シンポジウム

子どもたちの未来を考える集い

～「静かなる教育論議」に向けて～

日時　3月28日(水)13:30～16:30　開場13:00
場所　中央公民館ホール

定員　300人・先着順（託児希望は申し込み時に）
申込　3月8日(木)から、企画政策課　☎33-1315　FAX33-1318
Eメール　kikaku@city.odawara.kanagawa.jp
はがき　〒250-8555　小田原市役所企画政策課
電話以外の申し込みの際は、「子どもたちの未来を考える集い申込」、出席希望者全員の住所・氏名・連絡先（電話番号またはEメールアドレス）を書いてください。

13:40～

基調講演

「いい親やめよう」

清水國明さん（自然暮らしの会代表）

テレビ、ラジオでのコメンテーターや新聞雑誌への執筆活動など幅広く活躍中。芸能界きってのアウトドア派として自然体験イベントや講演活動も多い。家族と共に楽しむアウトドアライフは、趣味でもあり、ライフワークでもある。

14:50～

パネルディスカッション

「子どもたちの未来を考える」

＜コーディネーター＞
和田重宏さん（寄宿生活塾主宰）
＜パネラー＞
清水國明さん・佐藤あゆみさん（小田原高校2年・オーシャンクルーズ・サポーター）・片山美代子さん（スポーツ少年団本部長）・藪田耕三さん（泉中学校校長）

小田原男声合唱団

1971年、小田原近在の合唱好きの仲間によって結成され、今年で創立30周年を迎えます。故福永陽一郎さんの指導のもと、1973年の全日本合唱コンクールでは銅賞を受賞、毎年の定期演奏会、各種レコーディングのほか、地域の音楽活動にも積極的に参加しています。小田原市制施行60周年記念事業として昨年11月に開かれた「全国童謡フェスティバル～白秋IN小田原～」の童謡歌唱コンクール一般の部において、最優秀賞と特別賞のダブル受賞を成し遂げました。

杉並木のまちに響いた小田原の歌声

小田原市と栃木県今市市が姉妹都市を提携してから20年がたちました。

これを記念して、今市市で開かれた「杉の街童謡フェスティバル」に、小田原男声合唱団が招待されました。「からたちの花」「あわて床や」など小田原ゆかりの北原白秋の童謡や、小田原市の創作童謡「ねずみがかじる」と「いつもの道」、そして今市市の創作童謡「そっとそしてゆっくり」などを披露しました。

重厚で豊かな歌声は、集まったたくさんの今市市民を魅了し、小田原と今市の交流はさらに深まりました。

問市民交流課　☎33-1703

「杉の街童謡フェスティバル」は、童謡を通じて交流の輪を広げようと平成8年度から開かれています。フェスティバルでは、他の市町村からも合唱団が参加するほか、毎年全国から詩を募集して今市発の「新しい童謡」を創作・発表しています。
本市からは小田原少年少女合唱隊が招かれ出演しています。

健康特集 最終回

ストレスを減らして、こころの健康づくり

健康づくりでは、体だけではなくこころを健康に保つことも大事です。ストレスの多い現代社会では、ストレスをどのように減らしていくかが鍵になります。ストレスとは一言で言えば精神的疲労のこと。こころと体は互いに深く関わっており、ストレスはさまざまな身体症状となって現れます。

ストレスの影響

症状の主なものとして、精神面では気分のおちこみ・うつ状態・無気力など、身体面では倦怠感・疲労感・脱力感などがあります。

また行動面では喫煙量が増える、欠勤・出社を拒否するなどもあります。

いずれも一般的にまじめできちょうめん、また頑張り屋の人に多いようです。

こころの病のサイン

こころの病を持っている人は、だれにでも気がつくようなサインを出しています。

●うつ状態または うつ状態になる前の症状

仕事のミスが多くなった／仕事の能率が低下した／遅刻や欠勤が目立つ／口数が少なく、つき合いも避けるようになった／表情が乏しく疲れた様子／ささいなことで涙が出る／寝つきが悪い、早朝目が覚める、仕事中によく眠る／自信を失い、つらい、死にたいなどと言う

●そう状態

怒ったり、泣いたり、攻撃的になったり、感情の起伏が激しい／急に金遣いが荒くなった

ストレスへの対応

私たち人間は、もともとストレスと闘うために備わった自然治癒力を持っています。心を安定させ前向きな姿勢を持つことが、自然治癒力の向上につながります。

しかし、自然治癒力だけでなく、自分自身でも気をつけることが大切です。

ストレスを解消するための方法としては、自律訓練法があります。リラクゼーション法とも言い、音楽療法、芳香療法などがあります。心身が緊張してしまっている自分をそのまま優しく受け入れ、緊張をほぐしてやるリラックス法もその一つ。1日20分のリラクゼーションは、2時間の睡眠に匹敵するほどこころと体を休めます。良いイメージを思い描くイメージ療法なども効果的です。

治療が必要なとき

ストレス対策は早く見つけて適切な対応を取ることが決め手となります。

心身症と考えられる症状がある場合でも、まずはじめに現われている症状をよく診てもらいましょう。その上で婦人科や内科など症状に応じた科に受診されるのが良いと思います。身体的検査を十分受け、その科の治療だけでは治らないとわかったときには、心療内科を紹介してもらうといいでしょう。

こころの健康を維持するために

まず自分の性格や能力をよく知り、過労を避け、ストレスを自覚しましょう。またストレス解消法を知っておくことや、相談できる相手を持つことなども必要です。休息や睡眠時間を十分にとり、ストレスをためないようにこころがけましょう。

市でも、こころに関する相談に応じることができるようなサポート対策を考えています。困ったことがありましたら、いつでもご相談ください。

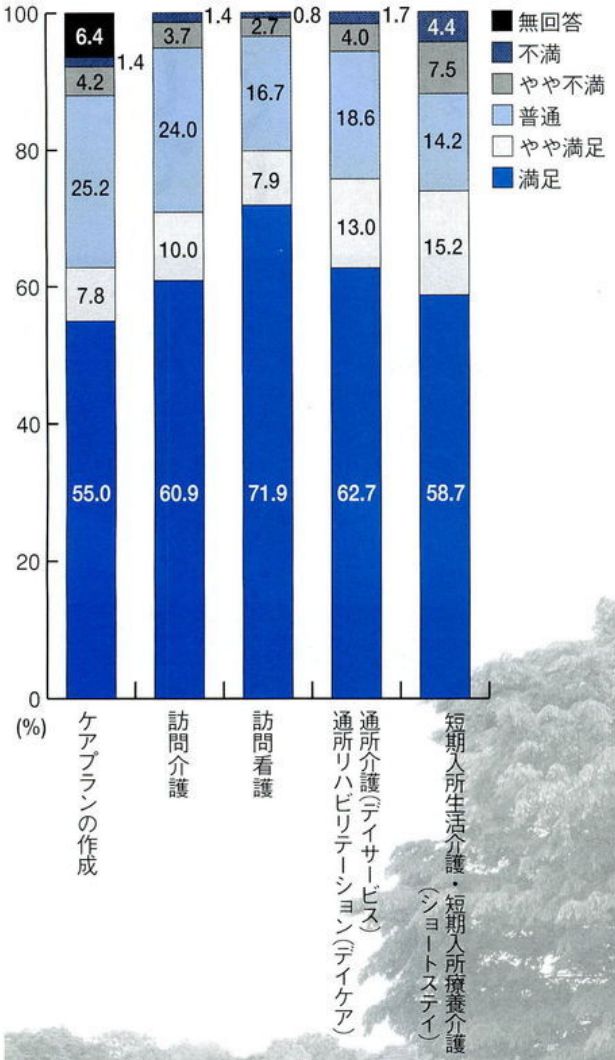
問市民健康課 ☎470820

サービスの満足度は7割

～介護サービス市民満足度調査結果～

昨年12月に、在宅の介護サービス利用者が介護サービスの利用状況や満足度などをどのように感じているかを把握するため、アンケート調査を行いました。その集計結果がまとまりましたのでお知らせします。

☎高齢介護課　問33-1875



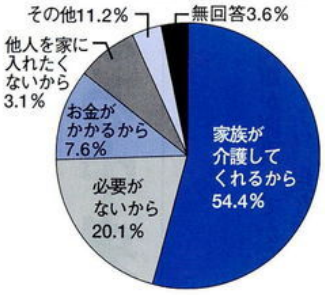
1 各サービスは約７割が「満足」

各サービスとも高い満足度を示しており、「満足」「やや満足」を含めると各サービスとも約7割の方が介護サービスに満足していることになります。小田原市では良質の介護サービスが提供されていると推測されます。

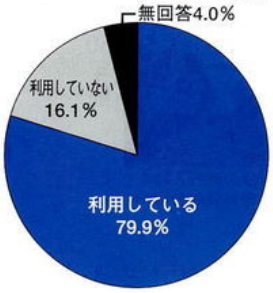
●満足していない点は…

満足していない点として多かったのは、「技術が未熟で介護が雑である」ことで、各サービスともに満足していない点の上位にあげられています。そのほか、「担当者がよく変わる」「予約がいっぱいで利用したい日に利用できない」などが多くあげられており、通所介護・通所リハビリテーション、短期入所生活介護・短期入所療養介護においては、送迎に関する不満も多くあげられています。

介護サービスを利用していない理由



介護サービスの利用の有無

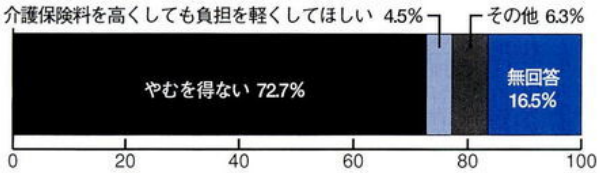


2 介護サービスの利用は８割 ３割は介護保険制度開始により 介護サービスを利用

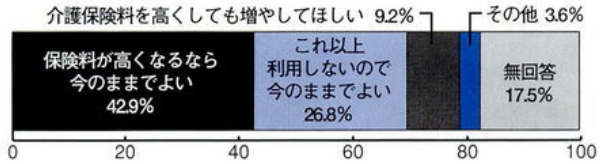
要支援・要介護認定を受けていて、ご自宅にいられる方のうち、８割の方が介護サービスを利用しています。このうち3割は介護保険制度以降に介護サービス利用を開始した方となっており、介護保険により介護サービスがより身近なものになったものと推測されます。

一方で介護サービスを利用していない理由としては、「家族が介護してくれるから」が最も多く、5割を超えていることから、介護サービスを利用していない方にとっては家族以外の介護に抵抗があることがわかります。

１割の利用者負担について



サービスを増やすことについて



3 １割の利用者負担は「やむを得ない」 保険料が高くなるなら 「サービスは増やさなくてよい」

1割の利用者負担については「サービスを利用している以上、やむを得ない」が7割以上を占めており、利用料金を支払うことについては、おおむね理解されているものと思われます。

介護サービスを増やすことについては「保険料が高くなるなら今のままでよい」が最も多く、「これ以上は利用しないので今のままでよい」と合わせると、現状どおりでよいという回答が7割近くを占めており、保険料を上げることには否定的であることがわかります。

介護相談員派遣事業

介護サービスを安心して受けられるように、市に登録した介護相談員が施設や事業所を定期的に訪問し、利用者から寄せられる要望などを施設や事業所に伝えてくれる事業です。介護相談員が訪問することを自ら申し出ている施設はサービスの質を良くすることに積極的なところで、現在は次のとおりです。

- ●特別養護老人ホーム潤生園　穴部377
- ●ルビーホーム　曽我光海2-1
- ●ルビーセンター　曽我光海2-1

派遣される施設はこれから増えていくと思われます。

4 このアンケートで 介護サービスの質は変わるの？

より良い介護サービスの提供を目指して、アンケート結果は市民の皆様に公表するだけでなく、サービスの改善につなげられるように市内の介護サービス事業者にも公表します。また、小田原市では、介護サービスの質の向上を図るために「介護相談員派遣事業」も行っています。

要支援・要介護者数※	3,111人
アンケートの送付数	2,249人
回収数	1,620人
回収率	72.0%

※平成12年11月末現在の人数です。

アンケートは７割以上の回収率

このアンケートは、特別養護老人ホームなどの介護保険施設、有料老人ホームなどに入所している方を除く、小田原市内にお住まいの要支援・要介護の認定を受けている方にお願いしました。このうち、7割を超える回答をいただくことができました。関心の高さがうかがえます。

愛され続けて半世紀
新たなる中央公民館へ！

問中央公民館 ☎35 5300

昭和25年に中央公民館が開設してから半世紀、生涯学習の拠点となって皆さんに愛されてきました。現在では、時代の変化とともに市民の皆さんのニーズはますます多様化し、新しい公民館活動が展開されています。

テレビに沸き返った50年前

昭和24年に施行された社会教育法により、全国市町村は公民館を設立しはじめました。小田原の中央公民館は、昭和25年に市制10周年を記念し現市民会館の場所に開設されました。以来、公民館事業は市民の学習やいきがいの創出、女性の社会参加の支援などに重要な役割を果たしています。

（昭和25年）社会教育法の施行と時をほぼ同じくして現在の市民会館の場所に開館した中央公民館

当時の公民館には、舞台付のホールや会議室がありましたが、自主事業の拡充に伴って成人学校などは市立第4中学校（現スポーツ会館所在地）を主会場として開校しました。また、この時代には珍しかったテレビが公民館の前庭に据え付けられると多くの市民が集い、歓声を上げるなど中央公民館は設立当初から愛されていました。

いつの時代も 生涯学習の拠点

開館してからは、改築や移転を重ねました。昭和30年ごろの講座は珠算や農業科学など世相を反映した内容でした。また、現在は廃止されている青年学級では「理容青年学級」など職業訓練的な講座も好評でした。

その後、自治会傘下の地区公民館も生涯学習の場として位置づけられ、中央公民館は国府津公民館や分館も含めた生涯学習の中心施設となり、時代に即した役割を常に担ってきました。

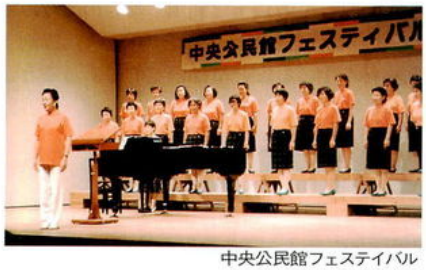
新たなる中央公民館へ

昭和55年には、市制40周年記念事業として、現市庁舎の敷地内に中央公民館が新築されました。その後は、市民の皆さんがいきいきと活動する場としての機能も充実し、「成人学校」「中央公民館フェスティバル」「市民教養大学講座」「サロンコンサート」など歴史ある事業のほか、市民文化祭など市民の活動・発表の場としても親しまれています。

平成10年度には、地区公民館の総合文化祭「いきいきフェスタ」、平成12年度には、生涯学習部の子ども事業の成果発表の場としての「きらめき子どもフェスタ」など時代の変化に対応した新規事業も展開しています。

現在、登録団体約170団体が活躍し、年間1万3千件、21万人もの方が公民館を利用しています。

これからも市民ニーズに応える豊かな生涯学習環境をつくり上げるため、中央公民館は未来へと進みます。



中央公民館フェスティバル

成人学校「男性料理専科」

サロンコンサート

現在の中央公民館

小田原彩時記

寒空に 家族で楽しむ 梅めぐり

フラワーガーデンの渓流の梅林は250種類の豊富な品種が自慢。2月には、先月の大雪もなんのその、可憐な梅の花が咲き乱れました。

来園者は、梅の香に誘われるように花に身を寄せ、フーッとため息を漏らします。子どもたちは花よりだんご。日曜日ということもあって温かい甘酒の振る舞いに大喜びでした。

恒例の草花の即売会では、早くもパンジーの登場にびっくり。小田原の梅やみかん、朝堀りしょうがなどなど野菜はどれも新鮮で大特価。家族みんなで、楽しい休日を過ごしていました。

渓流の梅林では、紅梅・白梅・淡紅など、1月下旬から3月上旬まで梅暦が続きます。

問フラワーガーデン ☎34 2814

おだわらの建築風景 11

まちで見かけた小田原の建築物

城下町、宿場町として栄え、明治期には政財界や文学者たちの別荘、保養の地として発展してきた小田原。
古い武家屋敷や農家、町屋のたたずまいは、明治以降の別荘とともにほどよく調和し、小田原独特の情景をかもし出しています。普段何げなく通り過ぎてしまう建物から、小田原文化の魅力を探ります。

建築士　平井泰延（栄町）

【籠清（本町）】

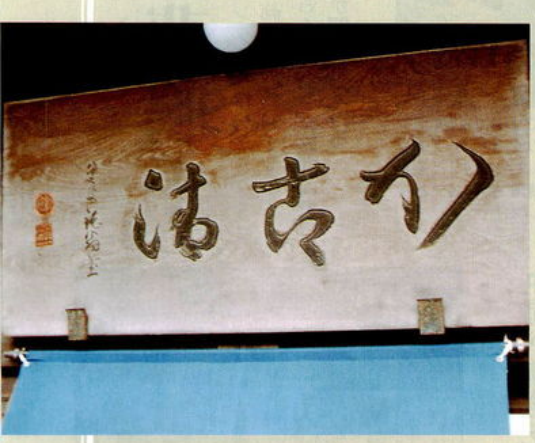
籠清本店の創業は、1814（文化11）年、187年前で小田原藩主大久保忠真の時代である。

現在の建物は、創業時の建物が1923（大正12年）の関東大震災で焼失したので、翌大正13年に建て直したものだが、震災直後の建築とは思えぬ造りである。

屋根は本屋が銅板葺、下屋が瓦葺になっていて、正面軒下に「か古清」と書した、益田鈍翁（24ページ参照）書の店看板が掲げてある。

籠清の名称の由来は、昔、籠屋与兵衛という人に大変世話になっていたので、その一字「籠」と、先代石黒清次郎の「清」をとって名付けたという。

「蒲鉾」といえば「小田原」というように、小田原で蒲鉾が栄えた理由は、参勤交代の大名が箱根越えのときに蒲鉾を食し、美味しかったため諸国に伝わったこと。相模湾でオキギス、カマス、イサキといった魚が豊富に獲れたこと。小田原の水がマグネシウムやカルシウムなどを適度に含み、これが蒲鉾づくりに適したこと、だそうである。



【飯田邸（中村原）】

この飯田邸を建てた先代の当主は、1923（大正12）年の船員手帳によれば、〈大阪逓信局海事部神戸出張所〉勤務で、諸外国へ航海したという。そのため、外国の建築様式を取り入れた木造平屋建の家を建てたという。

関東大震災後の1924（大正13）年の洋風建築だから、おそらく地元の工事人も苦心したものと思われる。当時としてはモダンな住宅であったろう。

ところが、室内の生活様式は日本的な畳の部屋で、床の間、床柱がある。おそらく長い海上生活の後は、日本間で落ち着いて安らぎたかったのであろう。わかる気がする。

敷地内に小さな稲荷社があって、洋風の外観と稲荷社の取り合わせを珍しいと見る向きもあろうが、長い外国航路を思うと、これも何となく理解できるようである。

太平洋戦争終結は1945（昭和20）年だが、その1、2年前から相模湾沿岸では、米軍上陸に備えて、疎開した民家に軍人が駐留した。

この飯田家でも、当時軍人が数名駐留したという。

小田原が危ない！ ごみ分別現場からの悲鳴！

問 環境事業センター ☎34 7325
問 環境総務課 ☎33 1471

美しい小田原を守るため、皆さんの協力で始まったごみ分別収集も4年。ごみ分別に携わる方は悲鳴をあげた。今、小田原では、ごみを出すときのモラルが問われている。

火を吹く ごみ収集車

「忘れもしません。昨年12月の大変風が強い日、白い煙が勢い良く吹き出し、自分の運転しているごみ収集車が燃えていることに気がつきました」と長田さん。すぐに消防署に緊急連絡をした。

「生きた心地がしませんでした。いつ背中でドカンと爆発するのか。でも、そこは車がやっとすれ違えるような狭い道。周囲に危険が及ばない桜井の新屋信号まで約300メートルを、息を止めて運転しました」と、今でも興奮して話す森本さん。

消防車が到着したが、むやみに車の蓋を開けたら最後。酸素をいっぱい含んだ空気が入り込めば、一気に炎上する危険がある。結局、消防車2台が前後を固め併走しながら、久野の環境事業センターまで決死のドライブ。センターに到着するころには、車のすき間から火が吹き出し、ごみ挿入口のアルミはどろどろ。間一髪、セーフ！ 二人の適切な対応と消防署員の必死の活動でなんとか最悪の状況は免れ、ようやく鎮火した。車はもちろん、廃車となった。

原因は、燃せないごみとして出されたスプレー缶などのガスなどが何らかの理由で引火し、燃えだしたようだ。燃せないごみにスプレー缶が混じって出されるのは、まれなことではないという。

「燃せないごみ用の収集車一台で、このくらいはライターが出されています」と差し出す森本博美さん（左）と長田直樹さん（右）

4月からライターを分別収集します

「蛍光灯」などと同じ日に回収します。

蛍光灯、スプレー缶等、乾電池・ライター、ビデオテープなど

ライターは乾電池といっしょに透明・半透明の袋で出してください。収集日は、地区ごとに違いますので、カレンダーで確認してください。また、スプレー缶は、使い切ってお出しください。家庭で穴を開けると爆発する恐れがあります。

仲間が腱鞘炎に ペットボトル作業場より

「一日中キャップをまわしていれば腱鞘炎にもなりますよ。利き腕の指にマメができて、それが堅くなってタコになりました。最初はきちんと守ってくれてたのに…」と大津功さんは残念そうに話す。

家庭から出されたペットボトル再生のため、現在は約6～7人のスタッフがキャップをはずし、異物を除く。この再生作業を朝8時から夕方まで手作業で繰り返す。各家庭のキャップは、年々この分別場に多く持ち込まれるようになった。

「ガラス・缶・ビンなど混じっていて、よく手が切れてしまうんです」と、大津さんは厚いゴム手袋を取り、傷を見せながら各家庭への協力を訴えた。

ここには小田原中から、夏場は1か月に70トン冬場でも40トンのペットボトルが運び込まれる。なんと平均すると、約11%は異物だという。

ペットボトルの出し方

①キャップをはずす
②中を水で洗う
③水をきって乾かす
④ビニール袋にまとめて出す

小田原彩時記 いいかげんにして！ 不法投棄

1月13日に城山陸上競技場上側の崖で、市環境部、建設部、下水道部、経済部とスポーツ課職員の合同による不法投棄物の撤去作業が行われました。崖の下にはおびただしい数の不法投棄物が…。作業員は命綱をつけ、命がけで下のごみを拾いに降りていきました。ごみの内容から察するに、企業などによる不法投棄物ではなく、家庭から出たごみがほとんどと思われます。以前はめずらしい山菜なども見られたこの周辺も、今ではすっかり変わり果て、ごみの山となってしまいました。

ごみの不法投棄は犯罪です！

不法投棄者が判明したときは、市では告発などの断固とした措置をとる予定です。私たちのまちは私たちの家と同じ。みんなで守っていきましょう。

火事・救急・救助は119

おちついて　ゆっくり　はっきりと

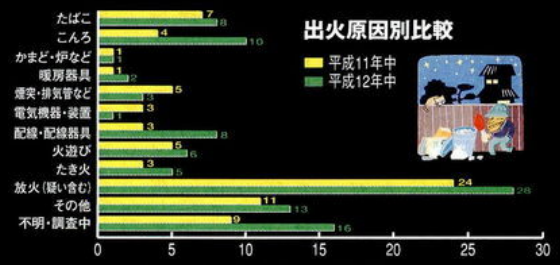
春の火災予防運動実施中

3月1日(木)～3月7日(水)

「火をつけた　あなたの責任　最後まで」

火災件数、増加！

平成12年中、小田原市では101件の火災が発生し死者2人、
負傷者11人の人的被害と9,000万円以上の物的損害が生じています。
平成11年中と比較すると、火災件数は25件増加し、
火災種別ごとの内訳では、建物火災が44件で全体の約4割以上を占めています。
出火原因別ごとの内訳では、放火(疑いを含む)による火災は28件(火災件数の約3割)で、
平成4年以降出火原因の第1位となり、前年に比べ4件の増加となっています。
主に、屋外に放置されたごみ類、車両のビニールカバー、
物置など建物の外周部、河川敷や田畑の枯草などが放火されています。



放火による火災を防ぐため、次のことを行ってください。
①家のまわりに燃えやすいものを置かない　②ゴミは収集日の朝に出す　③新聞・洗濯物を取り忘れない
④暗がりには照明器具を付ける　⑤物置には必ず鍵をかける　⑥車のボディーカバーは、防炎製品にする
⑦路上駐車をしない　⑧共用の廊下・踊り場に燃えるものを置かない
⑨枯れ草を放置しない　⑩地域ぐるみで放火対策を実施する

消防本部・消防署・消防団　(問)予防課　☎49-4424

『竹沢先生と云ふ人』

長與善郎

御無沙汰になればなるほどへんに行きそびれて了って、嘗てない御疎遠の挙句自分がはじめて小田原の家を訪問したのはもう紅葉も見頃をすぎた頃だった。

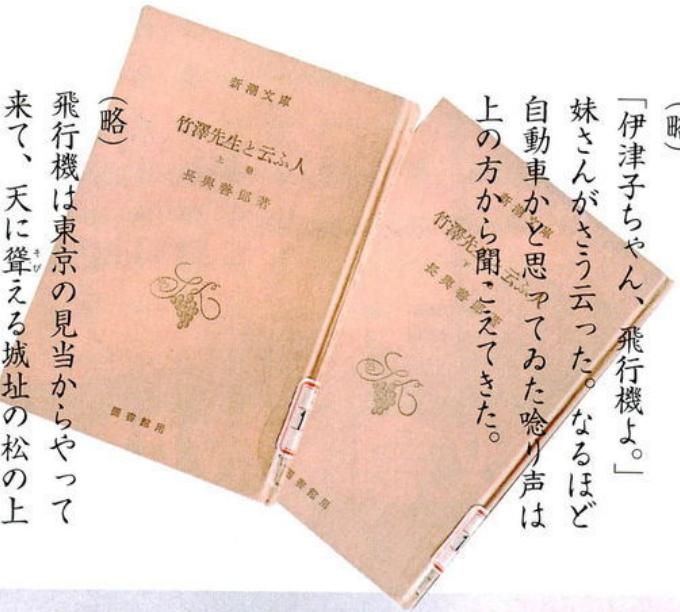
（略）

「伊津子ちゃん、飛行機よ。」

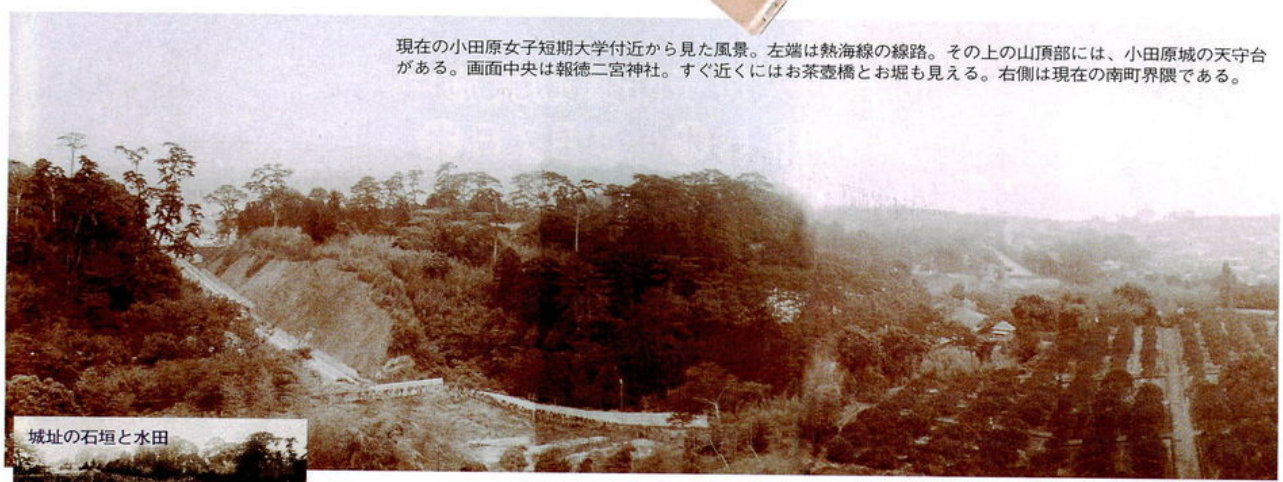
妹さんがさう云った。なるほど自動車かと思ってゐた唸り声は上の方から聞こえてきた。

（略）

飛行機は東京の見当からやって来て、天に聳える城址の松の上を斜めに横切り、田圃を越えた向ふに大仕掛けで切り通しを掘りつ、ある丘の方へ飛んで行った。何十人と云ふ工夫が一寸鶴嘴をおいて一息しながら、反り返ってそれを仰いでゐるのが小さく見える。



現在の小田原女子短期大学付近から見た風景。左端は熱海線の線路。その上の山頂部には、小田原城の天守台がある。画面中央は報徳二宮神社。すぐ近くにはお茶壺橋とお堀も見える。右側は現在の南町界隈である。



城址の石垣と水田

長與善郎（1888年～1961年）は、武者小路実篤らが創刊した「白樺」に参加し、小説、戯曲、評論などを発表し活躍しました。「白樺」は、ヨーロッパ美術を紹介したり、人道主義を掲げて、大正文学に一時代を築きました。

「竹沢先生と云ふ人」は、「白樺」廃刊後に創刊された雑誌「不二」に連載されました。

語り手である私が、元ドイツ語の教師で小説・脚本・評論などを書いている竹沢先生と知り合い、死別するまでの10年あまりの交流を描きながら、先生に託して作者の人生観、世界観、宗教観などを語っている大正時代の代表的な思想・教養小説です。

作品の後編、先生の妹が胸を病み、その療養のために一家で小田原に移住した先生を、「私」が何度か訪ねます。その中で、小田原城址の近くに田圃があったことや、熱海線の工事と思われる「大仕掛けで切り通しを掘」っているところなど、当時の城址周辺の様子が描写されています。

このコーナーでは、映画・絵画・写真・小説・詩などの作品に登場する小田原を紹介しています。
小田原が扱われている作品をご存じでしたら、市広報広聴室までお知らせください。☎33-1261

小田原市
ホームページが
おもしろい

Odawara ホームページ Kid's City が変わったゾ！

小田原キッズシティー

問教育研究所　☎33-1727

新キャラ登場！

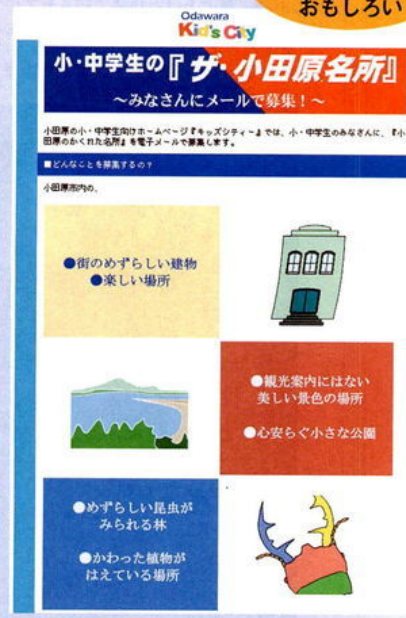
小田原の小・中学生向けのホームページ『小田原キッズシティー』に、新しいキャラクター『きんじろうくん』『ちょうちんたろうくん』『ウメ子ちゃん』の3人が登場しました。新キャラクターは、市内に住む3人の中学生が小田原をイメージして作ってくれたものです。これから、みんなのホームページをPRしてくれるよ！

『きんじろうくん』➡
『ウメ子ちゃん』↘
『ちょうちんたろうくん』⬇

メールで募集中

お待たせ、新コーナー 小・中学生の「ザ・小田原名所」

小田原のかくれた名所を電子メールで募集します。観光案内に載っていないすてきな場所やめずらしい建物、心安らぐ小さな公園、また、めずらしい昆虫が見られる林など何でもオッケーです。小・中学生のみなさん、どんどん応募してください。寄せられた情報はキッズシティーのホームページ上で紹介します。



小・中学生の「ザ・小田原名所」
ホームページアドレス
http://www.city.odawara.kanagawa.jp/kids/meisho/

キッズシティーのホームページアドレス
http://www.city.odawara.kanagawa.jp/kids/

キッズシティーのＥメールアドレス
３月３１日まで：od-kouzu@fsinet.or.jp
４月　１日から：kenkyujo@netspace.or.jp

「さあちゃんのぶどう」は日本一！

なんと、小田原の4歳の少女が、全国子ども創作コンクールで日本一に輝きました。子どもの感性で描かれたこの作品には、審査員もびっくり。絵本となって発刊されました。

簑島沙宥実（みのしまさゆみ）ちゃん（南鴨宮・荻窪保育園・4歳）

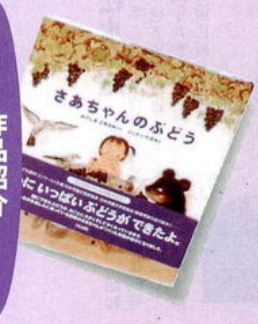
２０００年子ども読書年記念～子ども創作コンクールにおいて、沙宥実ちゃんの作品「さあちゃんのぶどう」は、〈幼児・小学生の部〉で最優秀賞を受賞しました。

「さあちゃんの家にできたぶどうを食べられちゃってがっかりしたの。ずっと見張っていたのに…」と きらきら輝く愛くるしい瞳の沙宥実ちゃん。

「祖父からもらったぶどうの木が、庭でみるみる大きくなりました。居間から眺めていたのですが、家が酒匂川の近くなので、ちょうど熟したころに野鳥が飛んできて、つまんでしまうのです」とお母さん。

この作品は、大好きなぶどうの成長とそれを巡っての動物たちの姿がいきいきと描かれています。

作品紹介



にわに　いっぱい　いっぱい
ぶどうができたよ。
さあちゃんは　ぶどうが　だいすき。
おおきくなって、　あまくなるまで
さあちゃんは　まいにち
まいにち　まったよ。
いよいよ　たべようとしたひ、
あれっ、どうしたの。
ぶどうが……。

発刊された絵本を抱えて、笑顔の沙宥実ちゃん（中央・荻窪保育園のばら組のお友達と）。この絵本「さあちゃんのぶどう」は、沙宥実ちゃんの作品に福田岩緒さんが絵をつけました。

「さあちゃんのぶどう」は、くもん出版から1.200円で発売中です。

茶と小田原と老欅荘

近代小田原三茶人

北条時代から茶趣に非常に縁が深かった小田原。明治維新後、大名などの後楯を失い、一時衰退した茶道は、礼儀作法として女子教育に取り入れられるなど新しい形で生まれ変わっていきました。

ここに紹介する三人は近代数寄茶人と呼ばれ、流儀の茶から脱して独自の茶道を打ち立て、多くの茶室・茶器などを生み出しました。

現在、松永記念館で急ピッチで老欅荘の整備が進んでいます。要人が集まって数々の茶会が開かれた老欅荘は、あの電力王・電力の鬼と言われた松永安左ヱ門（耳庵）が昭和21年に建てたものです。

小田原を舞台に茶の道を極めた近代小田原三茶人は全国的にも有名です。

益田鈍翁（孝）（ますだ どんのう）。昭和10年ころ。鈍翁は三井の大番頭と呼ばれ、これを世界最大の財閥に育て上げた功績で知られています。
鈍翁が小田原に掃雲台をつくり移り住んだことから、全国から次々と茶人たちがこの地を訪れました。このことから「小田原詣で」の言葉が生まれました。

野崎幻庵（廣太）（のざき げんあん）。昭和15年春　自怡荘にて。幻庵は、茶人たちの茶会記事を、個人的に創刊した中外商業新報（日本経済新聞の前身）などを通じて詳細に報じ、茶道を広めました。三越社長を辞めたあと、小田原に自怡荘（葉雨庵）・安閑草舎を相次いで建設したことでも有名です。

松永耳庵（まつながじあん）。昭和40年ごろ、老欅荘の縁側で。耳庵は戦後の経済界を指導し、「電力の鬼」として知られました。晩年は老欅荘に住み、茶の湯に親しむ生活を送りました。

松永記念館　老欅荘

心におみやげ、見つけて小田原。

発行●小田原市　小田原市荻窪300番地　〒250-8555

総務庁速報結果より